



①
私の石 2011- セメント

セメントを泥団子のように丸めて作った人工の石です。
石はこれまでに1万個以上制作され、展示会の度にゲリラ的に様々な場所に設置されてきました。
設置された石は、はじめのうちは場所の風景を相対化しながらも、徐々にその土地に馴染み、その土地の「自然の石」となっていきます。
今回大見村には、比較的大きなものを15個設置しています。

②
私の石 (on the log) 2020 セメント、木

「私の石」を木に植えつけた作品です。
作品を置いているエリアの足元を見てみると、家屋跡らしきセメントの基礎に生えた苔、
割れたガラス、灰など、様々なものが重なり、影響し合い、自然とも人工とも取れない不思議な状態であることがわかります。
人工石が生えた木材もそのようなものとして、この場所に置かれています。

①、②の作品は点在しています。

③
パブリッククリーム (コロナ対策ver.) 2020 セメント、ハンドクリーム、アルコール消毒液

スーパーの入り口に設置されているアルコールスプレー。その一方で、ひとりひとりが所有するハンドクリーム。
同じ手につけるものでありながら、この二つにはプライベート／パブリックという相反する要素が含まれています。
アルコールで荒れた手のケアにクリームを使うべきか、いろいろな人が触ったクリームの除菌としてアルコールを使うべきか。
迷ったら目の前の川で手を洗うのも一つの選択肢です。

④
Installation by Pattern of Dark (cloud, #5, #27) 2020 ターボリン、インクジェットプリント

何かを塗りつぶすときや掻き消すときに用いる筆致をモチーフにした、パターン(図案)の作品です。
近づけば手書きのドローイングですが、少し離れるとその筆致が規則的に反復されていることが見て取れます。
今回は濃さが異なる2種類を重ね合わせ、空(雲)と森を背景に展示しています。
広大で複雑に見える自然の景色も、小さなディテールの繰り返しや、その重なりでできていることを表しています。

⑤

石の橋 2020 川底の石 制作協力：藏園悠介

橋の下を流れる川の石を、橋の上に移し替え、川の環境を再構成しています。

「橋」という人工的に作ることが当たり前のものにおいては、「機能」が無意識のうちに優先され、フラットな床面が選択されているように思います。歩行者しか通らないこの場所ならではの、環境に合わせることを最優先した構造物です。

⑥

SCHEMA 2020 木材にウレタン塗装、アクリル塗料

図面において立体図の裏側を表す「点線」は、実際にはこの世に存在しない、概念的な存在です。

しかし、もしそれが実線の手前に描かれるならば、それは「点線という物体」に変わります。

線(図面)から立体物を作るのではなく、線そのものを立体にすることが、この作品の目的です。

白／黒／直線／立方体などの人工的な要素を、森の自然環境の中に対比的に設置しています。

⑦

Direction of Materials 2010 紙にインクジェットプリント

紙でできたブロックは、木材を模倣したものであり、設計、プリント、組み立てという手順で作られています。

ブロックの表面は、木材の年輪のように全て異なる模様になっています。

単一のサイズに整えられた木材は、人工と自然の中間地点のような状態として考えることが可能です。

この作品では、その「中間地点」を逆向きの方から作り出すことを試んでいます。

⑧

環境カゴ 2020 虫かご、セメント ワークショップ

「ねじれたネイチャー」を作るワークショップです。

大見のねじれた自然環境を象徴するものとして、カゴの中にはセメントの地面が作られています。

この中に入ると面白そうなもの、また、すでにねじれてしまっているものを見つけて、ぜひコレクションして下さい。

展覧会に寄せて

私は熊本県人吉市で生まれ育った。ちょうどこの展覧会の企画を詰めている最中、7月4日に熊本県豪雨が発生し、私の実家は180cmの高さまで浸水した。普通に暮らしていれば、市内中心を流れる川の水が家の天井にまで上がってくることなど、到底信じられない出来事であった。

「ねじれたネイチャー」という展覧会タイトルは、大見村の自然環境に由来している。集団離村を経て、人工物と自然が溶け合ってしまったような、不自然な自然が大見村にはある。しかし、同時にこのタイトルは、既にねじれてしまった現在の地球環境についても表している。近年頻繁に発生する大型台風は、大見村においてもその地形を変形させるほど猛威を振るっている。大見新村プロジェクトのメンバーと共に村に数年間通う中で気づいたのは、平和で変わらない里山の風景などではない。災害によって人工物と自然はますます複雑に混じり合っている。

「新しい生活様式」同様、私たちの自然に対する認識と関わり方は、もはや変化せざるを得ないだろう。そのような中で、私たちと自然を繋ぐ「ポジティブなねじれ」を探求することがこの展覧会における私の使命だと考えている。

松延総司は1988年熊本県生まれ、2008年京都嵯峨芸術大学短期大学部卒業。主に京都と滋賀を拠点に活動。図と地で言うところの「地」に着目し、日常のなかで人々が無意識化している抽象的な物事(線、影、法則、素材、癖など)をコンセプチュアルにとらえ直す作品を制作。

www.matsunobe.net

テキスト：松延総司